

SSTL

NO. 89 25.7.22

職場参加ニュース

学校、職場、地域で ごちゃごちゃと共生社会へ

共に学び、共に働く街づくりを



松山美幸さん
幼年期薬害の為難聴。小、中、高と通常級。結婚・育児期を挟み、一般雇用と障害者枠雇用の双方を経験し考える。手話は娘と一緒に学んだ。現在は一人旅満喫中。



坂口佳代子さん
出生時外傷による脊髄損傷。小、中、高と通常級。障害者多数雇用企業で頸腕症となり退職。結婚、離婚後、3人の子育てと並行し就労模索。現在障害者福祉施設長。



前田海里さん
大脳白質ジストロフィー(難病)。どの子も地域の公立高校へ埼玉連絡会に参加し公立高校の道がひらけ、大学にも。卒業後も宅配便の会社で週3日のバイト継続中。



山下浩志さん
コーディネーター(NPO法人障害者の職場参加をすすめる会事務局長)

考えるシンポジウム

9月20日(土)越谷市中央市民会館

5階 第4、5会議室 13:00受付 13:30~16:30

会費(運営協力費): 300円 手話通訳: 依頼中

主催: NPO 法人障害者の職場参加をすすめる会(代表理事・大塚眞盛)

後援: 越谷市(依頼中)

※この事業は社会福祉法人越谷市社会福祉協議会「愛の詩基金助成金」をいただいて実施しています。

学校、職場、地域 — 人の狭間で人として生きる —

6・22 総会記念シンポジウム、ワークショップを開催しました

6月22日(日)に開催された、NPO 法人障害者の職場参加をすすめる会総会では、職場参加のバトンを千間台の就労継続支援B型事業所「せんげん台世一緒」へしっかり手渡してゆくために、越谷の本部をその近く(最近まで探して千間台2丁目の陸橋通り沿いに確定)に引っ越して、密接に連携した動きをしてゆくことが決まりました。



以下では、総会後のシンポジウムを簡単に報告します。

シンポジストの皆さんは、まず思春期にひんぱんてんかん発作があった柴田美恵子さんです。

つぎに、自閉症と診断され絶望し暴れた幡本建祐さんです。

お二方とも、通常学級、高校で共に学んでいたからトラブルもしばしばあったのですが、だからこそ出会いも積み重ね、地域で共に働くことにつながったともいえます。

もうお一人のシンポジストは、竹迫和子さんです。「いまは特別支援教育に分けられているから、なおさら共に働けない状況が生まれている。県とか国に訴えているが力不足で、特例子会社とか福祉の方とか、働くところもどんどん分けられている」と語りました。

コーディネーターは、県立大学名誉教授の朝日雅也さんです。「障害者にはこういう配慮や環境が必要だって強調しすぎちゃうと、システム的なものになっちゃう」と述べられました。

仕事ができる時は幸せだった 理解がなくても働けますよ

柴田「最初お店に行ったころはいじめがあつて、やめよう



思った。仕事ができる時は、2 しかった。伝票は書けなかつた。

品出しができたことは幸せだった。ほめられた。」

朝日「貯金はたまらなかつた？」

柴田「貯まらなかつた。」

朝日「今はそういう仕事じゃなくて、今の毎日は楽しいですか？」

柴田「楽しいよ。お金なんかいらぬもん。」

朝日「佐々商事で働いていたことは、人生においてよかったですか？」

柴田「よかった。理解がなくても働けますよ」 朝日「強い気持ちも大事ですね」

幡本「そんなに準備が整わなくてもいいと思う。」

もともと何が必要っていうのはわからない 一緒にいる中で考えていくもの

朝日「幡本さんは中学校時代に自閉症と診断され、それまでなんで医者に連れて行かなかったんだと両親を責めたり。部活で厳しい教員を恨み、通りがかりの子供に八つ当たりしたこともあった。ただ、高校の時にわらじの会と出会い、橋本克己さんの介助に関わる中で人との出会いを重ねた。そして今は亡き糸賀さんに不幸自慢の部屋の助手を勧められ、自分を面白く感じられるようになった。常にフラッシュバックがあるが職場でラインを止めてしまうのでクビになった。現在の職場は流れ作業ではなく騒音もあるので、フラッシュバックが妨げにならず仕事を続けられている。」

幡本「わらじの人の介助を重ねて、良い経験をさせていただいたと思う。今働いてる会社は2013年からだけど、段ボールで箱を作ったりしている。人間関係もいい。野球中継を見たりしている。昔の人や嫌なことや楽しいことをよく思い出す(フラッシュバック)。本が好きで村上春樹さんとか。自分の障害について興味があって、発達障害についてテレビや本を見ている。わらじに出会えたことはすごくよかったと思う。」

朝日「たくさん大事なことを言っていた。今の段ボールの会社はもう11年6カ月勤務されていると。ガサガサとしているからフラッシュバックの状況になってもそんなに気にならないと。実際はいろいろ思い出している。でもそれは仕事に問題ないと。」

幡本「ないです。上司には怒られたんじゃないかと心配してくれた。」

朝日「特徴がよく理解されているのかもしれないね。」



あとは友人との楽しい時間、休みを充実させるためには仕事がいかにあるって大事ですか？」幡本「そう思います。」

竹迫「もともと何が必要っていうのはわからないので、一緒にいる中で考えていくものだと思います。一緒に学ぶというのはつきあいがわかるということだと思えます。人の中でトラブルがあってもなんとかして

ゆこうということをお互い経験していくことが大事なのかなと。」

朝日「特別支援教育を望む人というのは、子供というより親ですよ。増えているというのはよく言われるのは、ちっちゃい時から専門的な教育を受けさせて地域で暮らしやすくするんだという意見について、竹迫さんはどう思われますか？」

竹迫「専門性が必要なものはあると思いますが、まず専門性ということによっていって、だんだんその子に合った教育というのは個別、1人1人に合わせたものになっていくとは思いますが、合理的配慮が言われるようになりましたが、本当は子供が子供とやった方が楽しいと思うし、一緒に育つ上での合理的配慮が必要だと思うのが、おかしな方向にいつているなど思うのは、親もそっちの方向じゃないとだめだと思っている。親はそれがないと不安で普通学級でできませんよと言われると心配だから支援学級、支援学校に行かせる。」

朝日「合理的配慮って特定の場合その人が必要とする調整のことを言うんだけど、全体として見て障害者の子にはこういう配慮や環境が必要だって強調しすぎちゃうと、最終的には個別性の高いものが必要なんだけど、システムのなってしまうと。竹迫さんみたいなお立場の先生って狭間の人ですか？主流ですか？」

竹迫「狭間の意味は深く考えてないけど、越谷養護にいた頃に高校入学の運動が始まって、県交渉とかに参加していた。泊まり込みやったり。その時にお前はなんでここにいるんだと言われた。悪い意味じゃなくて。どうしてだろうって。自分でもすごく矛盾した人間だなと感じながら。障害のある子どもだけが集まって大人に囲まれるより子供は子供と一緒に学校に行く方が楽しいよねと思って。」

朝日「狭間って窓って意味もあるんですよ。窓は小さくともいい。開け続けていることが大切だと思います」



| | |
|--|---|
| <p>すいごごカフェ 7/23~8/27 1時半のゲスト </p> | |
| <p>7月23日(水) 野島久美子さん 介助付自立の草分け</p> <p>会場はせんげん台世一緒</p> | <p>わら細工の話をします</p> <p>せんげん台「世一緒」の通所者二人がわら細工に登録して、一人は続かなかつたけれど、一人は野島さんの介助をたまに頼まれてやっています。それで「世一緒」の中でもわら細工という言葉が時々出ますが皆わからないので話してもらいます。</p> |
| <p>7月30日(水) 飯田 渉太さん べしみ若手通所者</p> | <p>社会へのドアが開いた</p> <p>東京ドームがバリアフリーになったニュースを見て、本格的にスポーツ観戦に行くようになり、駅のホームドアも初めて知り、同年代の選手と出会い、お客さんと同じ時間を共有。また社団の「若い衆」との出会いも始まりました。</p> |
| <p>8月6日(水) 山下 浩志さん +α 当会事務局長</p> | <p>総合県交渉一埼玉流って</p> <p>なんで「総合」って付けるの? 「交渉」っていうのはなぜ? どこが「埼玉流」なの? 40年前から、ここ埼玉に生きる障害者、家族、支援者たちが、県の担当者たちとせめぎあい、切り拓いてきたものを、知っていますか?</p> |
| <p>8月13日(水) 盆休み</p> | <p>盆 休 み</p> |
| <p>8月20日(水) 青木 将好さん 会社員</p> | <p>東方 Project そして言葉</p> <p>言葉って難しい。でも作品を介してだったら通じ合える。東方 Project は自社のゲーム、音楽 CDなどを加工した創作やその販売を認め、コミケ規模の出会いを創る。同じように、身近な暮らしの中で他者同士が出会うには?</p> |
| <p>8月27日(水) 大坂 富男さん</p> <p>会場はせんげん台世一緒</p> | <p>鉄腕アトム of 福祉論</p> <p>埼玉障害者市民ネットワーク事務局の大坂さんによる「売り込み講座・第1弾」鉄腕アトム of 福祉論 (いのちを考える) です。-</p> |
| <p>第1、2、3、5水曜の会場は、ハローワーク越谷向かいの職場参加ビューロー世一緒です(要予約048-964-1819)。どの日も13:30~15:00 ゲストトークがあります。で生きる障害のある人ない人、いろいろな人が語ります。</p> <p>第4水曜の会場は、せんげん台イオン並びの就労継続B型事業所「世一緒」です。こちらもどうぞ! (せんげん台 048-971-8038)</p> | |

2025年度会費、寄付ご納入ありがとうございました。(五十音順、敬称略)

【正会員会費】、阿久津康仁、朝日雅也、有竹和子、内野かず子、大坂富男、大塚眞盛、尾谷英一、黄川田仁志、木下恭子、小森陽子、佐々木洋子、清水泉、竹迫和子、田島玄太郎、谷崎恵子、辻浩司、辻彩子、友堅由紀恵、中山佐和子、西陰博子、野村康晴、橋本克己、長谷川 顕、幡本洋子、原和久、日吉孝子、前田直哉、正木敬徳、松尾晃史、水谷淳子、水谷浩志、谷塚祥子、山崎泰子、山崎有子、吉田久美子、吉原広子

【賛助会員会費】岩崎廣司、及木聡、及木順子、佐藤恵美子、島根淑江、並木理、原田真弓、

【団体会員】NPO 法人共に生きる街づくりセンターかがし座

【寄 付】 小野達雄、小森陽子、出村常子、長谷川 顕、水谷 淳子

2025 定期総会・シンポ後の

ワークショップ報告

「もやもやが 入口のカギ？」

昨年度総会后 および共に働く街を創るつどいの二度にわたり、ワークショップを開きました。

白か黒かの判断を下すのではない、他の人に同意するのでも、反論するのでもなく、関係なさそうなつぶやきをもらすたりすることも含めて、知的障害や精神障害といわれる人たちも一緒に運営してゆくことが、当法人がめざしてきた原則です。

そこでは、多数決原理だけではない、多様な表現を受け入れる場が必要になります。

昨年初めて取り組んだワークショップでは、そうした原則を生かしてゆく可能性を感じ取る貴重な機会となりました。

今年の定期総会とシンポジウムの後も、時間の許す範囲で、3グループに分かれてワークショップを開きました。

以下は各グループのファシリテーターからの報告です。

第1グループ

飯島さん：ごちゃごちゃした関係でいいんじゃないかという発言がありました。せんげん台せ一緒も民間もみんなごちゃごちゃしたらいいんじゃないかって。福祉サービスだけじゃだめなんじゃないかという私の思いがあるので、印象に残りました。



第2グループ

原さん：話題の中心は、新しい越谷から千間台に移る事業所、せ一緒がどういうイメージになるのかということでした。B型は法律の枠に縛られているけど、縛られない仕組みがどうしたらできるのかな



という話になりました。

第3グループ

菅谷さん：せんげん台せ一緒についての話はしなかったんですが、職場参加に限らずみんなモヤモヤしていることがあると言っていました。幡本さんと柴田さんの話を聞いて、柴田さんは自分の強い意志のもと職場で一生懸命働いたと、幡本さんは好きな仕事に就いて、環境にも恵まれているということがわかりました。



最後に、全体進行の朝日さんから、「初めに言ってしまうと先入観を与えるかと思いましたが」との断りつきで、「せんげん台に新しい事務所ができるこの機会にあらためて、せんげん台地域の職場をしらみつぶしに訪問し、地域適応支援事業のつぎの展開を探していくことも考えてみたらどうかと思いましたが」とのアイデアも示されました。

1994年8月24日第三種郵便物承認



7月11日(金)生活クラブ生協越谷ブロック地域協議会主催により、同生協越谷センター会議室で「憲法カフェ」が開かれました。

各自の日々のちょっとしたもやもや話を出し合う中で、「生存権」とか「基本的人権」とか「戦争放棄」とか、ふだんタマエとして流してしまっている「権利」のイメージを具体的にしてみようといったひととき。進行役デビューは、世一緒に手伝っている理工学系の学生・比嘉さん。

優生思想と向き合い多様性を生きる



きっかけづくりの語り手は、世一緒に事務局の障害当事者・日吉さん。

まずは旧優生保護法が違憲と認められ、補償が決まったのに、申し立てをする被害者がほんの少ししかない問題。手術をやった側に記録があるのに、一律に連絡を取

って補償をしないから闇の中。何も解決してません。

一方で、新型出生前診断を普及させ、生まれる前に遺伝子操作をして障害児を排除しようとしています。法は、選別ではなく、産む・産まないは親が決めるという。私の母は私が生まれたことで、親せきからいろいろ言われた。私は子供心にも「お母さんが選んで産んだんじゃない」と思っていました。親戚はかわいがってくれましたが、私が見てないところで、そういう言葉を母に投げました。

障害児が生まれるのがわかっていて産んだら、母以上に辛い言葉を投げかけられるだろうなと思います。

私は人類がアフリカを出てからここまで地球上にはびこったのは、いろんな人がいて、その中には障害者になる遺伝子を含めて多様性があったからこそ、生き残ってきたんじゃないかという思いがあります。

新しい形でどんどん障害がピックアップされて、それを覚悟して産んだ親に対して、今の世の中は、私の母よりもっと、顔も知らない人から責め立てられます。そう思うと腹立たしい。そういう選択をした人をほめたたえて、よくぞ生んでくれたと、いろんな人が手を貸して、世の中がちょっと変わっていいかという思いがあります。

「向こうも被害者だよ」って思いも

もうひとつ。バリアフリー法やいろんな法律ができ、ありがたいのかよくわかりません。

かって企業に初出勤した時、面接の時にはなかった手すりが付いていて、??? 上司に尋ねたら、日吉さんへ

の配慮だという答えに啞然。「ありがたいけど、なんで私に訊かないで、想像で付けちゃったんですか」彼は目からうろこ。しばらく二人で見つめ合っていました。

私の時は、話ができる同僚と話す、自分が育ってきた保育所、学校で、障害がある子供と出会う機会がなかった人が99%。私とつきあうようになって、「障害者って明るいね」「いいけど・・・暗いのもいるよ」

ほんとに障害者と切り離されて育ったがゆえに、向こうも被害者だよ」って思いもありました。子ども時代から一緒に育った方がいいよねという話をしていました。

バリアフリー法に基づいた設計のトイレを開けた時、おむつ交換のベッドが拵がって中へ入れなかったり。

向こうの事情があると思うのですが、何かアリバイ的な感じがします。もう少し本人たちの意見を聞いてもらいたい。当事者がいないで作るのは、仏作って魂入れずだと思います。

いろんな人がいることがいい

日吉さんの話を聴いて、みんなの一言：

・私の生まれ育った島には、重い障害をもった人の社会資源が何もなかった。

・病気の重い人、車椅子が必要な人は、生まれたら一かして引っ越していった。

・昔、道路の隔壁

が自動車を基準に設計され、バイクだと寝るので頭をぶつけてしまう事故が起こった時も「合理的配慮」という言葉を知った。

・バリアフリーについて私達の意見を聴いてほしかった。

・子どもの世界を構成する時に、いろんな人がいることがいいと実感する。

・お友達のお子さんが車いすで特別支援学校を出て、卒業後も介護を受けて生活している。私自身は普通の学校で学び卒業したが、聴きながら書いたりなど苦手なことがあり、クリニックで調べて障害がわかった。たくさん話が聴けてよかった。

・教育の県交渉、がんばりましょう。

普通学級に分けられて生きてきた

比嘉さんまとめ：

今日、自分は普通の学級に分けられて生きてきたんだと思った。「合理的配慮」とか「特支学級の子は〇〇していかなくやいけないんでしょ」と学んだり、言葉から入って、分けられて過

ぎしてきた。障害者がいないことがあたりまえだったから、バリアフリーのこと

か、まちがった結果になっちゃうのかな

と思った。ふれあったり、感じたりしながら入って、いろんなことを感じていきたい



定期総会で決まった2025年度の事業計画 (総会決議のまとめ)

難問を抱えながらも、今年度は20年余りお世話になった越谷の本部を閉じます。

そして、せんげん台「世一緒」の近くに事務所を移し、せんげん台「世一緒」で活動する障害当事者、支援に関わる職員、そして地域の連携団体、協力者の方々と、これまで以上に一緒に動くやりかたを探ってゆきます。

とりわけ、せんげん台「世一緒」も含めて当会が長年にわたり取り組んできた、障害の種別・程度や就労準備性に関わりなく、誰もが職場・地域に共に参加し、職場・地域が障害者に参加する取り組みをさらに広げ、自治体施策にも反映される状況をめざします。

以上を、本部事業のありかたと担い手の見直しを伴う試行事業として、適時評価を行いながら、今年度と来年度の2年間にわたって取り組むこととします。

7月26日に、職場参加ビューロー・世一緒で越谷花火大会の夜店を開催し、例年のように交流会を行い、これまでの事務所での活動のふりかえりとせんげん台への移転をお知らせし、引き続き協力と連携をお願いする場とします。

9月をめどにせんげん台の新事務所に引っ越します。越谷地域の諸機関、団体、個人へ長年のお礼を兼ねて、今後の新たな連携と協力をお願いをしていきます。

その後、せんげん台「世一緒」と相談の上、せんげん台周辺地域の諸機関、団体、個人へのあいさつ回りを行います。

せんげん台新事務所での9月以降の「職場参加の基盤形成のための支援事業」の実施については、当番、すいごごカフェ、Love Shirakobato プロジェクトなど、越谷方式の継続を基本としながらも、せんげん台「世一緒」の通所者、職員等の参画可能な条件を常に探ってゆきます。当番の謝金の原資となる事業の確保についても考えます。



す い ご ご

FLASH

●4月23日 大野言弥さん(キッチンとまと)



「(せんげん台)世一緒に入って6年&キッチンとまとに入って5年目の話」。大野さんは、電車のドア開閉の際、アナウンスする駅員の心の声もまじえて演じたり、さまざまな

キャラクターがいるバスの運転手さんのアナウンスや駅によって異なる障害者割引担当駅員の声を再現。そして、大野さんが大好きなキッチンとまとの配達担当のJさんについて、「お待ちどおさまでしたってという言い方がいい感じですよ。」「おはようございますってという言い方がJさんらしいです。」と。また、メモも見ないで、ワーカーズコレクティブ・キッチンとまとの電話番から見た5年間の営業成績をふりかえった。

●5月14日 竹迫和子さん(障害児を普通学校へ全国連絡会世話人)



地元埼玉を会場として、11月22日(土)、23日(日)に開催される「第22回 障害児を普通学校へ・全国連絡会 全国交流集会」を、どんな形で取り組もうとしているか、

中間報告的に話された。竹迫さん曰く「埼玉でやることになった時、『高校へ』とか『普通で』とか言っても、誰も来ないよ」と言われました。「予め『就学前』、『中』、『後』とテーマを立てていたんですが、見直しました。」そして、私たち埼玉で運動に関わってきた者たちがいちばん望んでいるのは、「分けないで」ということ。それはまた、国連・障害者権利委員会の日本政府への総括所見で強調されていることでもあること。そこから「会えないのはなぜ」がテーマに集約されてきた。

●6月4日 出村常子さん(ファミリーリンク前代表)



ファミリーリンク越谷の取り組みを紹介。子どもたちが店長役の1日子ども商店街や種まきから収穫、五感を使った農業体験、ゲーム感覚で楽しめる公園ぐるっとチャレン

ジなど。出村さんは、地域活動の経験をもとに「体験の大切さ」と「挑戦する心」を軸に講話を展開しました。「体験があるからこそ、喜びも悩みも分かち合える。子どもも大人も失敗から学ぶことができる」と語り、年齢に関係なくチャレンジする姿勢が人を育てることを伝えました。

●6月11日 比嘉克樹さん(工業大学4年)



タイトルは「今の22歳が考えていること」。最近露骨に感じたのは就職活動の情報のこと。基本的に就活早期化などを煽って就職活動をさせている。今は就職しやすくなっていると思いますが(企業の数でいうと)より搾取構造になっていると思う。コロナで学生生活を思うように過ごせなかったのも、より対面の大切さがわかるというか、大事にしていきたい。勉強=知識を入れるということを目的にせず、その先に人と人につながれるみたいなこと、体で感じたり、実際に見たり、そういう生き方が出来たらなと。

●6月25日 吉田久美子さん(NPO法人共に生きる街づくりセンターかがし座理事長)



6月25日のせんげん台世一緒のすいごごカフェは、「パタパタ? 🐣ぱたぱた? 何するところ?」(せんげん台の皆の感じ方)そこに1人のせんげん台利用者が週1ぐらいで通っている...そのパタパタのことをせんげん台の皆に話してほしいというイメージで開催された。

長い間、その地域活動支援センター・パタパタの施設長を務めてきた吉田さん、職員、利用者の紹介をしながら、パタパタについて説明された。地域活動支援センター(地活)は障害福祉サービスではなく、自治体もお金を出す地域生活支援事業なので、利用計画は不要で、手帳か診断書を持って市役所に行き、登録すれば大丈夫と吉田さん。「パタパタは地活で、サービス向上型というんですけど、毎日来なくてもいいんです。生活に合わせて自由に活動ができます。すごく私は大事だと思います。」

最後の花火大会 夜店

7月26日(土)5時過ぎ、7時過ぎからの越谷花火大会に向けて、職場参加ビューローでは、夜店と交流会の準備が始まりました。9月が来てくれるかなあと心配していたのが嘘のように、元世一緒障害者スタッフたちが早々と集まってきて、あちこちで職場や家族の近況など交換しながら、準備中。元障害者スタッフのTさんの進行で、時間帯ごとの店番希望者を募りシフト表を作っています。

花火が始まる前、生活クラブ越谷ブロック地域協議会でいつも一緒に活動している越谷市民ネットの大田市議が、お子さんたちとそのお友達を連れて立ち寄ってくれました。市民ネットの事務所は土手沿いにある、そちらでも夜店を出していて、大変賑わっていたそうです。



ここ世一緒で花火大会の夜店を出したのは2005年が初めてで、2020年から2022年まではコロナ禍で開催されなかったため、今年で通算18回目になります。

きっかけは、初代代表理事の鈴木操さんが商工会や法人会の役員を務めていたことから、当NPO法人も商工会に加入したことにあります。

「職場参加」とは、障害者側の活動にとどまらず、職場の事業主や労働者が障害のある人たちと出会うことで、自らの働き方や暮らし方を見つめ直すことです。そのため、私たちは支援者というだけでなく、自らも事業主・労働者であることを自覚し、共に考えるきっかけとして、商工会の一員としてその行事に積極的に参加してきました。

来年は拠点がせんげん台へ移転するため、花火大会で夜店を出すことはできなくなりますが、しかし、「職場参加」の原点を大切にしながら、形を変えて継承していきたいと考えています。



花火が打ち上がり始めた頃、盲ろう・下半身まひの橋本克己画伯が世一緒に到着。まず食事をとり、それから私と二人で出発。世一緒より奥の道路も車両通行止めになっていたため、花火をよく見られる土手の近くまで移動しました。

画伯はほぼ全盲ですが、暗い夜空に浮かぶ花火はある程度見えるようです。手話で花火の情景を表現してくださいます。ただ、いつも少しいつむきがちなので、空高く打ち上がる花火が本当に見えているのかと心配になりますが、ご本人によれば「見えている」とのことです。

越谷のこの場所はなくなりますが、つながりは今後も続きます。それを確認するように、今回は例年の夜店とは異なり、「一人一言」タイムを設けました。

画伯は花火の様子を手話で表現し、参加者全員が想いを共有する時間となりました。



さまざまな障害がある人たちが、地域や職場の中で共に働き・暮らしているようすを、もっと身近で知ることができたら、超高齢社会の不安に苛まれることもなくなるのではないのでしょうか。そんなことを思った花火大会の夜店と交流のひとつときでした。

